

脊椎疾患患者の精神的な関わりを考える

中5階病棟：丸山貴美子・小林けさい

小穴 恵子・椎名 敏子

1. はじめに

脊椎疾患患者の痛み、しびれなどの神経症状は、外科的治療を受けても残存することが多く、鎮痛剤や神経ブロックなどによっても効果的な症状緩和が得にくい。そのために開腹術後の患者などに比べ、鎮痛剤、精神安定剤の希望が多く、また長期に渡る。

私たちは、痛みの訴えしかせず他のことに関心を示さない患者の看護を経験し、また他の脊椎疾患患者たちの言動から、身体の苦痛は精神状態へも影響を及ぼしているのではないかと考えた。そしてこのような患者たちへ、どのように関わっていったらいいのか学びたいと思った。

2. 研究目的

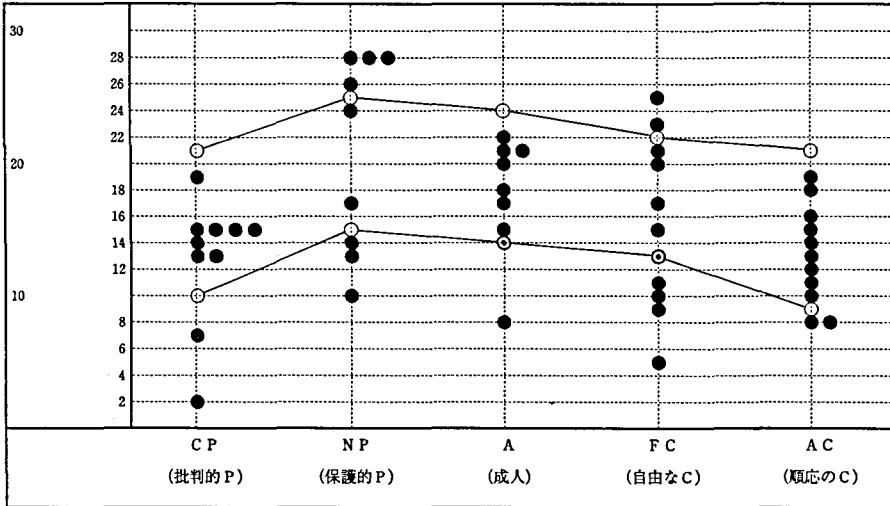
脊椎疾患患者の自我状態の傾向を、デュセイ・ジョン・Mによるエゴグラムより明らかにし、事例を通し痛みや精神面における看護婦の患者への対応を検討する。

3. 研究方法

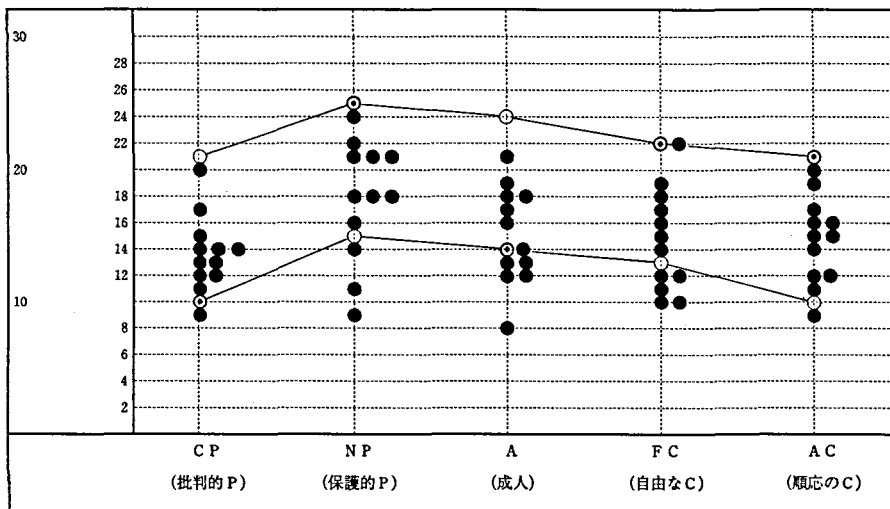
- 1) '93年4月～8月に当病棟へ入院した脊椎疾患患者10名のエゴグラムをとり、自我の状態を分析する。(資料1参照)
- 2) 対象群としてメンバー13名のエゴグラムをとり、1)と比較する。
- 3) '92年12月～'93年3月に当病棟へ入院したF氏の5回目の手術に当たり、看護記録から痛みと精神状態の分析と、それに対する看護婦の援助を分析する。

4. 研究結果

- 1) 患者のエゴグラムでは、親、成人、子供の自我状態のそれぞれの値は様々であり、ある1つの自我が特別高くなるというような患者同志の傾向は見られない。しかし保護的親、自由な子供の自我が標準の域値より高い患者が数人いた。(図-1)
- 2) メンバーのエゴグラムでは、それぞれの自我の値は標準の域値内にほとんど集まっており、底値の人はいるが高値を示している人はいない。(図-2)



図・1 患者のエゴグラム



図・2 メンバーのエゴグラム

3) 事例

(1) 患者紹介

F・T氏 31才 男性
 病名 頸椎椎間板ヘルニア, 頸部脊椎管狭窄症
 家族構成 妻, 長男6才, 両親同居
 弟 東京在住
 職業 コンピューター会社 営業
 既往歴 十二指腸潰瘍

趣味 パズル, 自動車

性格 本人 無理をするほう

妻 我慢強くぐいぐい引っぱっていく。怒ったりどなったりする面もある。

社会資源 身体障害者1級

現病手術歴 '90年3月 C3-7椎弓切除, 脊椎固定術

'91年4月 C3-4前方除圧術

10月 C2-7前方除圧, 椎間板摘出術

'92年5月 C2-7脊椎固定術

(2) 入院後の経過

'92年11月30日, 他院より疼痛緩和を目的とした手術をするため転院してきた。F氏は口数が少なくささやくような小声で, 無表情でうつろな視線であった。妻は無言のF氏に包み込むような接し方をしていた。

痛みは後頭部から両肩甲骨にかけて持続的にあり, 顔, 上肢にはしびれがあった。足に毛布が当たるだけで痙攣がみられた。

日常生活動作は食事の時パンやおにぎりを持つ, 排尿時当てられた尿器の固定をすることが, 唯一できることであった。

薬剤はクリノリル, ダントリウムなどを多量に内服し, 鎮痛剤, 精神安定剤は図-3, 4に示すように頻階に定時使用されていた。これは前回入院中に鎮痛剤の要求が徐々に短時間となり, 使用量が増加の一途にあったため, 看護婦がF氏に定時使用を提案したことが, 発端となっていた。今回は更に夜間のソセゴン, アタラックスPの使用や, 眠前のユーロジンの内服が増えていた。

F氏からのコールの内容は痛み, 排泄, 食事の場面のものがほとんどで, 看護婦の対応もこれに限られており, その他の話題が持てず余裕を持って接することができなかった。

'93年12月10日5回目の手術C2-7椎弓切除術が施行された。

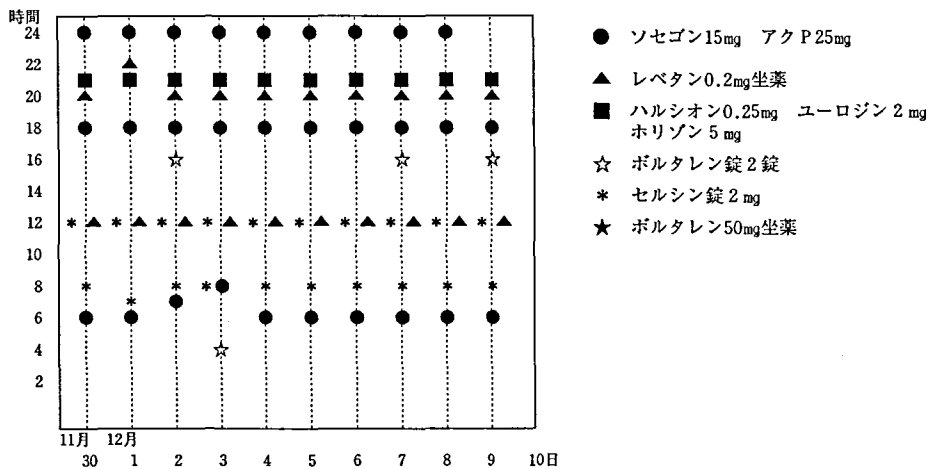


図-3 術前の鎮痛剤使用状況

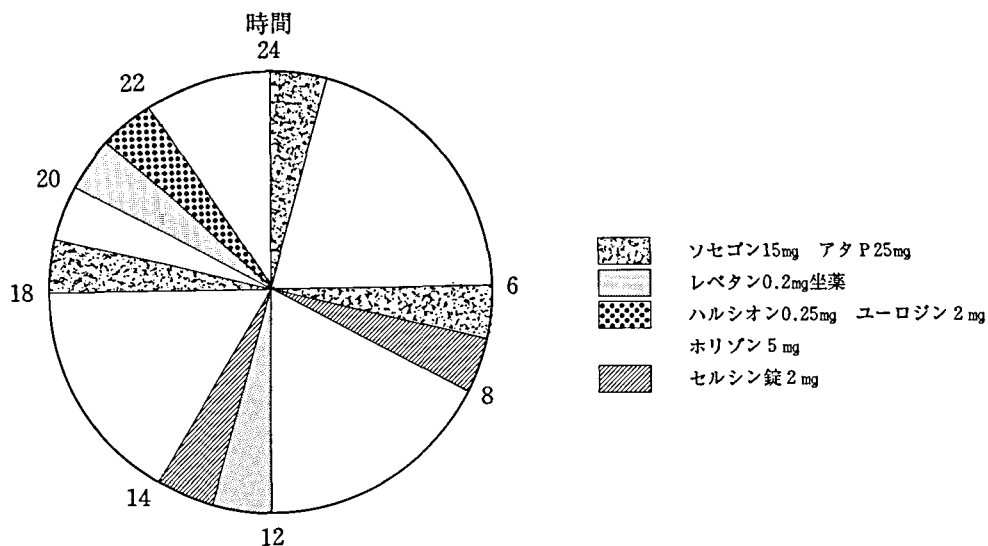


図-4 一日の鎮痛剤使用状況

(3) 看護の展開

A. 看護上の問題

- 鎮痛剤，精神安定剤の薬物依存が高い。
- 自分の意志や感情を表すことがなく，ボーッと表情に乏しい。
- 妻に対する甘えや，妻のF氏に対する過干渉と思える態度が見受けられる。
- 看護婦は，対応が表面的で困惑している場面がある。

B. 看護目標

- 症状の緩和を計り，薬物依存から離脱する。
- 看護婦や妻の対応から，F氏が回りに目を向け家人や家の改築，将来についてなど視野が広げられるようにする。

C. 看護の実際

'90年3月の入院時は歩行していたF氏が，4回の手術を受けた現在，寝たきりの状態となっている。今回の5回目の手術に期待できるのだろうか，痛みは本当に取れるのだろうか，看護婦は不安や疑問を持っていた。またF氏は今までも今回も，手術に対して意見や疑問などを口にすることがなく，どう考えているのかわからなかった。更に鎮痛剤，精神安定剤などの連用による薬漬けの状態が続くことは良い結果にならないと考えた。

またF氏の言動が痛みの訴えに限られていたため，看護婦から次のような意見が出され，日々の胸の内が吐露された。

- ・今度痛いと言われたらどうしよう，何をしようと思ってしまう。
- ・他の話題提供ができず，F氏のベッドサイドに長く踏みとどまっていられない。
- ・気の毒で言葉が出ない。

- ・手を出したくても、どうしたらいいかわからない。
- ・F氏の所へ向かう足どりが重い。

そこでF氏の日々の入院生活を振り返り人間像に近づき、今後の看護の方向性を見い出そうと、精神科医より講演を受け次のような助言をいただいた。

- ・薬はすっぱり切らなければならない。
- ・F氏が何の疑問やためらいもなく5回目の手術を受け入れることが問題である。
- ・患者の精神状態を知るためには、社会的な背景までもありとあらゆる情報を集めることが大切である。

そして看護婦間のカンファレンスで次のような方針を立て、医師、F氏、妻と確認をし統一を計った。

- ・クリノリル、ダントリウム、ソセゴン、レベタン、精神安定剤は術後使わない。
- ・痛みにはボルタレン坐薬で対応する。
- ・妻への甘えや妻の過干渉をなくすため、付き添いはずす。

術後1日目、「いてもたってもいられない」「体がガクガク振るえる」「首から肩がピリピリしびれて自分の体ではないみたいな気がする」「寒気がする」「吐き気がする」などを訴え、手足をそわそわ動かすなど薬物の禁断症状と思われる症状が出現した。医師と相談しホリゾンの投与で軽減した。以後セルシンのみ、定時内服となった。

痛みはF氏によると術前の半分ぐらいにまで軽減し、ボルタレン坐薬50mgを0～1回/日の使用範囲にとどめることができた。(図-5) 妻は3回/週ぐらい面会に来ていたが、その日の夜間痛みを訴えボルタレン坐薬を要求することが多かった。

更に身動きひとつできず苦しい思いをしているのは自分だけではないことに気付いてもらおうと、肝切除術などの大きな手術を受けたり、半身麻痺をかかえても黙々とリハビリに励んでいる患者のいる病室に転室を試みた。

またF氏の意識を家族や自宅の改築、将来のことに向けようと話題を持つようにした。妻とも話をするようにした。

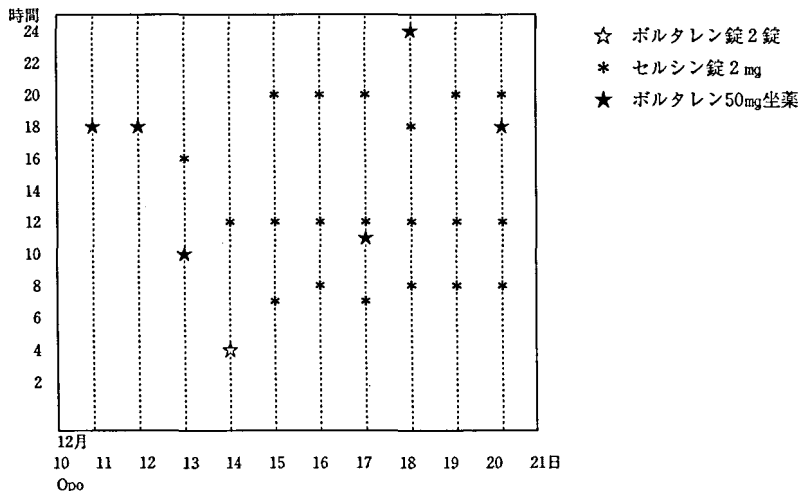


図-5 術後の鎮痛剤使用状況

5. 考 察

当初看護婦は、脊椎疾患患者のエゴグラムは、たとえば順応の子供の自我が高くなり否定的に働く傾向があるのではないかと考えていた。(資料2参照)しかし、実際にはそのような傾向は見られなかった。ただ保護的親や自由な子供の自我が標準の域値より高い人が数人おり、メンバーのエゴグラムに比べ個性が強いと考えられ、成人の自我を汚染している状態と思われる。そしてそれが看護婦には、訴えが多くやっかいな患者という印象に映るのである。

人が困難をもたらす様々な人生の状況に直面した時に、内部でとっさに反応する部分は親または子供の自我状態のいずれかであると言う。しかしそれは良い結果をもたらすことはなく、望ましいのは成人の自我が反応し冷静に問題をとらえ解答を見出し行動するという形である。そのためには気づきと訓練が必要であるが、看護婦はこの気づきの場面に働きかけることが大切である。

術前のF氏のエゴグラムは、図-6に示すように順応の子供の自我が自由な子供の自我より高くなっており、表情や言動から考えると順応の子供の自我が否定的に働いているようである。看護婦は、成人の自我が表出するように気づきの場面へ働きかけようと考えた。

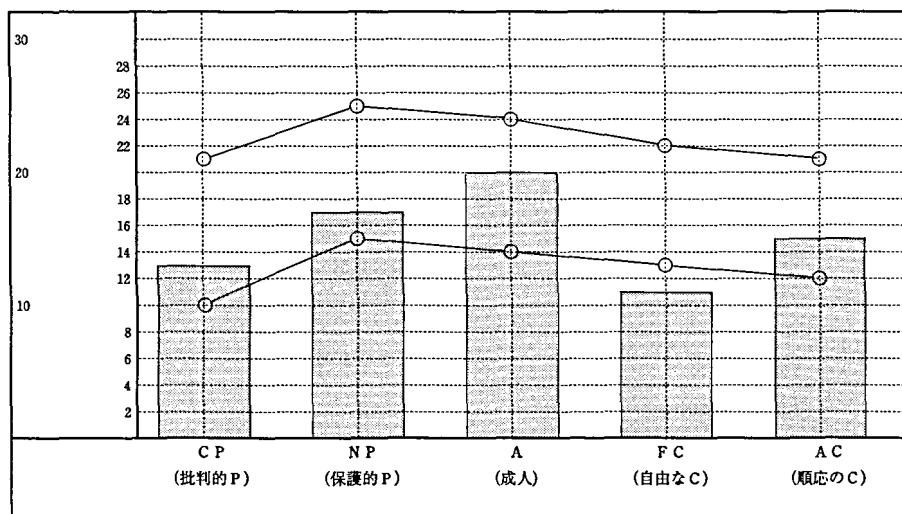


図-6 F氏のエゴグラム (術前)

そこで重症患者の部屋への転室、家族や家、将来のことへの話題の提供を試みた。痛い我慢できるという言葉が聞かれるようになり、ストレッチャーで散歩に出かけたり、コーヒー楽しんでいる場面も見られるようになった。看護婦がセッティングすれば、自助具を使って食事や歯磨きもできるようになりわずかではあるが日常生活行動の範囲も広がった。言葉数も増え、痛み以外の話もするようになり、精神的に開かれてきたと思われる。

術後のF氏のエゴグラムは図-7のように、順応の子供の自我より自由な子供の自我の方が高くなっており、自分を表現することができるようになったのではないかとと思われる。また批判的親の自我が高くなっており、心に厳しさも出てきたと考えられる。

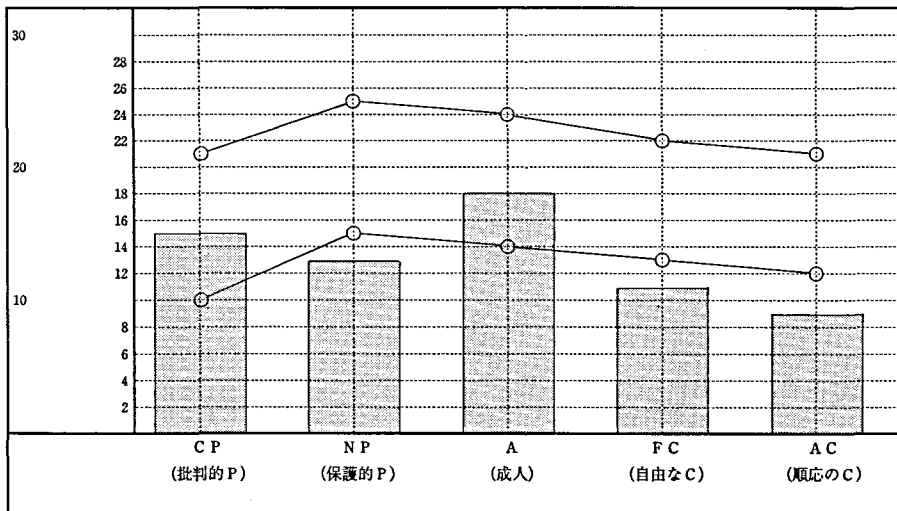


図-7 F氏のエゴグラム (術後)

しかし、休職中の仕事の解雇の期限が半年延びたこと、自分の体がもっと動けるようになるかもしれないという期待から家の改築を延期していること、経済面は両親から援助されており、それが成り立たなくなった時は弟が援助してくれるかもしれないと考えていることから、まだまだ外からの援助への期待が大きいと思われる。また妻の面会日の夜にボルタレン坐薬を希望することは、甘えもあるように思われ、看護婦の働きかけが力不足であると痛感した。そして医師、理学療法士、作業療法士、ケースワーカーなどの協力を得て働きかけることが大切であると思った。

当初、薬物依存からの離脱は困難と予想された。術前カンファレンスにおいてF氏、妻、医師、看護婦間で依存性のある鎮痛剤や精神安定剤はすっぱり切ろうと合意が得られた。そのため薬物の連用はいけないというF氏や妻の自覚があり、医師、看護婦間における術後の方針に迷いもなくスムーズに対応することができ、離脱は成功したと考える。手術により痛みが軽減したことも離脱できた一因であるが、方針が決まっていたことで成果が上がったと思われる。

6. まとめ

- 1) 脊椎疾患患者のエゴグラムからは、自我状態に患者同志の明らかな傾向は見られない。
- 2) 脊椎疾患患者のエゴグラムでは、保護的親と自由な子供の自我が標準の域値より高い人が数人おり、メンバーのエゴグラムに比べ個性が強いと考えられる。
- 3) 患者の精神状態を知るためには、より深く広く社会的背景の情報収集をしなくてはならない。
- 4) 事例において患者、妻、医師、看護婦間の術前カンファレンスでの合意により、術後薬物依存からの離脱に成功した。
- 5) 事例において成人や自由な子供の自我が表出するように気づきの場面に働きかけることによって、術前と術後のエゴグラムが変化した。

7. おわりに

脊椎疾患患者の痛みなどの神経症状が精神症状へも影響を及ぼしているのではないかと研究に取り組んだが、明らかな関係は見い出せなかった。しかし看護婦の働きかけによって、患者の自我状態が変化するということを知った。今後このような患者は身体的、精神的、社会的場面において情報を深く広く得た上で看護していきたい。

本研究にあたり、御指導、御協力いただいた皆様に感謝いたします。

8. 参考文献

白井幸子：看護にいかす交流分析，第一版，医学書院，1983,P14-39

資料1

エゴグラム

年 月 日施行
 氏名 年齢 男・女 No
 答えを右の中から選んで数字(3, 2, 1, 0)
 であいている欄へ記入してください。
 あまり深く考えないで、気楽にやってください。

はいいつも (3)
 しばしば (2)
 ときどき (1)
 いいえ めったにない(0)

1	動作がきびきびしていて能率的である				
2	あけっぴろげで自由である				
3	相手をみくだす				
4	周囲の人にうまく合わせていく				
5	伝統を大切にする				
6	相手の長所によく気がつき、ほめてやる				
7	相手の話には共感する				
8	現実をよくみて判断する				
9	感情をすぐ顔にあらわす				
10	物事に批判的である				
11	遠慮深く、消極的である				
12	思いやりの気持ちが強い				
13	イヤな事は理屈をつけて後まわしにする				
14	責任感を大切にする				
15	まっすぐな姿勢で相手の顔を見ながら話す				
16	不平不満がたくさんある				
17	人の世話をよくする				
18	相手の顔色をうかがう				
19	「なぜ」「どのように」という言い方をする				
20	道徳的である				
21	物事の判断が性格である				
22	「わあ」「へえ」などと驚きをあらわす				
23	相手の失敗や欠点にきびしい				
24	料理、洗たく、そうじなどを積極的にする				
25	思っていることを口に出せないたちである				
26	上手に言いわけをする				
27	「……するべきだ」というような言い方をする				
28	じっとおとなしくしているのが苦手である				
29	規則をきびしく守る				
30	わりあい人あつかいがうまい				

31	相手に喜んでもらえるような努力をする					
32	言いたいことを遠慮なく言う					
33	いろいろな情報（事情）を集めてよく考える					
34	わがままである					
35	「すみません」「ごめんなさい」を言う					
36	自分の感情をまじえないで判断する					
37	好奇心が強い					
38	まわりを気にしない					
39	理想を求めていく					
40	実行する前にしっかり計画を立てる					
41	会話では感情的にならない					
42	困っている人をみたらなぐさめてやる					
43	奉仕活動では人の先になって働く					
44	意見をはっきり主張する					
45	理屈よりも直感で決める					
46	融通（ゆうずう）がきく					
47	欲しいものはあくまでも欲しがる					
48	相手の失敗をすなおに許してやる					
49	誰とでもよく話す					
50	頼まれたらイヤとは言えない					

30						
	28					
	26					
	24					
	22					
20						
	18					
	16					
	14					
	12					
10						
	8					
	6					
	4					
	2					
		CP (批判的(P))	NP (保護的(P))	A (成人)	FC (自由な(C))	AC (順応の(C))

資料2

肯定的にも否定的にも働く自我状態

